

## 子供達が笑顔で暮らせる世界を目指して

岡田 恵美子

広島は七つの川でできたデルタの上であり、その三方を低い山に囲まれ、一方は瀬戸内海に面しています。1945年8月6日午前8時15分、史上初めて原爆が落とされました。アルファベットのTの形をした相生橋が原爆投下の目標とされました。広島市内の爆心地から半径2キロメートル以内すべては、10秒もしないうちに壊滅しました。原爆が投下された当時の人口は、アジア各地からの留学生やアメリカ人捕虜、大勢の韓国人を含めて約35万人だったと言われています。7万人が即死、さらに7万人がその年の末までに亡くなったと推定されています。原爆の威力は、主なものとして爆風、熱線、放射能があげられます。放射能は、広島市の爆心地から半径4キロメートル以内くまなく広がりました。

私の家は爆心地から2.8kmの所にありました。家族は両親、12歳の姉の他、5歳と3歳の弟がいて、私は8歳で国民学校の3年生でした。私もその頃には、どういことが起きているのかは理解しており、前線に行く兵隊さんたちをほとんど毎日見ていました。私は幼いながらもそうした兵隊さんたちを尊敬し、憧れておりました。広島は軍都で、第五師団という強力な軍隊が駐屯していました。全国各地から多くの兵士が広島に集められ、広島港からアジアの戦地へ出征しました。

東京、大阪、名古屋など大都市のほとんどが空襲を受けたことはラジオを通して知っていました。このような状況下にあって、一般市民も銃後の日本を守るため、竹槍訓練やバケツリレーで火を消す訓練が求められていました。空襲警報が発令されるとすぐに、モンペをはき防空頭巾をかぶって防空壕へ避難しました。主食にも事欠く状態であったため、国民学校の運動場でカボチャやイモや大根を育てました。広島駅では新たに入隊する兵士たちをよく見ました。彼らは「万歳！万歳！」と叫んでいました。当時、私を含め、国民学校3年生以上の子供たちは田舎に疎開しました。8月5日、私は戦地に向かう従兄を見送りに広島駅へ行き、疎開先には戻らず自宅に帰りました。その時に原爆が落とされました。（それ故、私はその翌日に原爆に遭ったのです。）

8月5日の夕方からは何度も空襲警報が発令されました。そのため、繰り返し防空壕へ避難したため、眠れない夜をすごしました。8月6日の朝、中学校1年生だった姉はいつものように元気よく「行ってきます」と家を出て行きました。姉は爆心地近くに建物疎開のため出かけ、二度と戻って来ませんでした。

今日に至るまで、姉がどこで、どうやって亡くなったのかもわかりません。

私達家族と一緒に朝ごはんを食べていたその時、飛行機の音が聞こえました。警戒警報解除の合図を聞いた後だったので、弟たちは頭上を飛んでいるのはきっと日本の飛行機だと思ったのです。彼らは飛行機に手を振るために庭へ走って行き、私もその後に行きました。空を見上げると青い空に輝く飛行機の機体が見えました。すぐに閃光があり、私は爆風で押し倒されてしまい、何が起きたのか全くわかりませんでした。弟たちのシャツやパンツは燃えて、ぼろぼろになっていました。二人とも肩や、腕、脚に火ぶくれができていて、痛みのために大声で泣き叫んでいました。避難する途中で、髪の毛が逆立ち、皮膚がただれ落ちた人を大勢見ました。激しい熱さの中で、苦しみもだえながら水をくれと言いながら次々に沢山の人々が亡くなっていきました。多くの方はひどく損傷を受けていたので、男の人か女の人かさえわかりませんでした。私は、おそらく放射能や熱風に長く晒されていたために、何度も嘔吐し、しばらくの間動けませんでした。

大勢の人が、広島駅北側の練兵場へと逃げて行きました。私達は竹藪の近くに横たわっていましたが、私の周りには眼窩から眼球が飛び出した子どもや、内臓が破裂して死んでいる馬が何頭も見えました。夏の暑い時だったので、弟たちのヤケド痕にはウジ虫がわき、痛くて泣き叫んでいました。母は焼け落ちた街へ行って、他人の骨を拾って帰り、それを粉にして弟たちのヤケドにつけました。広島駅から瀬戸内海まですっかり焼け落ちた市全体を見渡せば、広島は炎につつまれ、天国に繋がる全てのものが焼け焦げたようでした。燃えるような夕焼けを見るといつも、あの辛い痛ましい日を思い出します。私は歯茎から出血していて、髪が抜け落ちていました。私は「疲れた、しんどい」と言いながら、しょっちゅう横にならずにはいられませんでした。人々は私の病はピカドン病で、私の体から毒を抜かなければならないと言っていました。私の病が原爆に引き起こされたものだとは知らなかったからです。

翌日から、母は三ヶ月近くの間、ありとあらゆる場所で姉を探し始めましたが、姉がどうなったのかわかりませんでした。母は街のどこかの救護所のことを聞くと、そこへ出かけて行き、似の島までも行きました。ちょっとでも可能性があると思われる所へは七つの川を渡りどこへでも出かけて行きました。母は、どの川も死体が溢れ、血で赤く見えたと言っておりました。

私の祖母は近い親戚の者を5人も亡くし、子供や孫達が深刻な病に苦しむのを見ました。彼女は仏壇に手を合わせ、「情けなや、情けなや、原爆さえなければ！」と言いながら、自分が亡くなるその日まで繰り返し叫んでいました。

8月15日、日本は降伏しました。日本の敗戦を喜んだのは、親から引き離されて田舎に疎開していた子供たちでした。子供達は親が迎えに来てくれるの

を待ちに待っていましたが、迎えに来たのは、多くはありませんでした。原爆が投下された後、2,000人から6,500人の子供達が孤児になったと推定されています。原爆孤児たちは生きのびるために、盗みや強奪、時には人殺しまで、あらゆることをやりました。こうした子供達は、果敢にも路上で靴磨きをしたり、煙草の吸殻を拾って売ったり、どんな仕事でもやりましたが、多くは暴力団の命令で働きました。進駐軍がジープに乗って広島市にやって来て、子供達にチョコレートやガムをくれました。原爆孤児たちは彼らの回りに群がり、競って物をもっていました。5年間くらいは、こうした子供達も多くの大人達も、憎しみや憤り、恨み、絶望を抱えていました。中には絶望のあまり自殺する人もいましたが、少しずつこのように病んだ感情を克服していきました。

原爆が投下されてから12年たった1957年、原爆医療法が制定され、被爆者はそれぞれ診断を受けました。多くの方がケロイドや白血病、原爆白内障、小頭症、甲状腺癌やその他の病気や合併症に苦しめられていました。私は再生不良性貧血と診断されました。

私は2005年に広島世界平和使節団の一人として、インドとパキスタンを訪れました。私はインドを訪れる前、インド人は賢明で、インドはIT産業の発達した国という固定観念を持っていました。しかしながら、ニューデリーに着いたとたん、動物と一緒に路上で生活している多くの人を見てショックを受けました。次の日、インド共和国を記念する祝賀パレードを見ました。それはインドの軍事力つまり、核ミサイル「アグニ2」、戦車、武装した軍隊、戦闘機などを誇示する華麗なパレードでした。一機のアグニミサイルに3億円かかると言われています。祝典会場の外には、ゴミの中から食べ物を探している大勢の子供達がいきました。インドでは80%の人が貧困に悩み、その子供たちは学校にさえ行けないのです。私は、軍事費が子供たちの教育に向けられたらいいのと思います。私達は非常なエリート校を訪れる機会があり、教科書を見せてもらいました。それにはインド以外の国はすべて敵であると書いてありました。自国防衛のためにインドの核武装に賛成すると言っていました。私達は日本のお寺も訪れましたが、そこは母親が売春婦である若い娘達や、HIV陽性の患者たちのシェルターとなっていました。

私達はパキスタンへ移動し、アフガン人のための避難民キャンプを訪れました。彼らのほとんどが、パキスタンへ行く途中で親が地雷でケガをしたり、暴力で殺されたりした子供たちでした。私達が滞在中、北朝鮮が核実験を行いました。カーン博士と呼ばれる卓越したパキスタン人科学者によって開発された技術を使ったものでした。

現在、地球上には少なくとも3万個の核兵器が存在します。1945年に広島で起きた悲劇を思い起こして下さい。そして全ての核兵器廃止のため、一人一人

があらゆる国、民族に訴えかけてください。

一部加筆したため、英文とは多少異なっています。